

(19)日本国特許庁 (J P)

(12) 実用新案公報 (Y 2)

(11)実用新案出願公告番号

実公平6-34316

(24) (44)公告日 平成 6年(1994) 9月 7日

(51)Int.Cl.⁸

B 65 D 81/32

識別記号

庁内整理番号

T 7501-3E

F I

技術表示箇所

請求項の数 1 (全 3 頁)

(21)出願番号 実願昭63-87619

(22)出願日 昭和63年(1988) 7月 1日

(65)公開番号 実開平2-8780

(43)公開日 平成 2年(1990) 1月19日

(71)出願人 999999999

株式会社吉野工業所

東京都江東区大島 3 丁目 2 番 6 号

(72)考案者 水島 博

東京都江東区大島 3-2-6 株式会社吉

野工業所内

(72)考案者 角田 義幸

東京都江東区大島 3-2-6 株式会社吉

野工業所内

(74)代理人 弁理士 今岡 良夫

審査官 会田 博行

(56)参考文献 特開 昭49-105692 (J P, A)

実公 昭56-9657 (J P, Y 1)

実公 平 3-4352 (J P, Y 2)

(54)【考案の名称】 二液混合容器

1

【実用新案登録請求の範囲】

【請求項 1】第一液を収容する主容器 1 と、第二液を収容する補助容器 2 とからなる二液混合容器であって、上記主容器 1 は、第一口頸部 4 を起立する第一容器体 3 と、該第一容器体の第一口頸部に周壁 8 を嵌合させかつ頂壁 7 上面に上方および前方開口の凹陥部 10 を設け、該凹陥部の底面 11 に第一口頸部内に連通する透孔 12 を穿設したキャップ体 6 と、上記凹陥部 10 両側壁に起伏自在に枢着することで起立状態にあっては上記透孔 12 と連通し、かつ倒伏時には外側面で透孔 12 を閉塞するノズル体 13 とで、また上記補助容器は、第二口頸部 15 を起立した第二容器体 14 と、該第二容器体第二口頸部外面に外部周壁 19 を嵌合すると共に、外部周壁上端から内向きフランジ 20 を介して上記第二口頸部内面に沿って、内部周壁 21 を垂下した筒状体 17 とでそれぞれ形成され、該筒状体の

2

内部周壁には起立状態で上記ノズル体 13 を押し込むことで開口される閉塞手段 22 を設けたことを特徴とする二液混合容器。

【考案の詳細な説明】

「産業上の利用分野」

本考案は二液混合容器に係る。

「従来技術」

従来、第一液を収容し第一口頸部に第一蓋体を嵌合した主容器と、第二液を収容し第二口頸部に第二蓋体を嵌合した補助容器とからなる二液混合容器がある。この二液混合容器は、二液混合に際して各蓋体を口頸部から外し、補助容器を傾けて第二口頸部を主容器の第一口頸部上端にあてがって第二液を主容器内へ注入し、その後主容器に蓋をして主容器を上下に振り二液を混合していた。

「考案が解決しようとする課題」

上記従来の二液混合容器は、記述の補助容器から第二液を主容器へ注入する際に、第二液が主容器第一口頸部外面へ流れ出たり、また注入中は二液の混合ができないなどの不都合があった。

本考案は、補助容器から主容器への液注入が容易で、しかも液注入中に二液の混合が行なえる二液混合容器を提供するものである。

「課題を解決するための手段」

第一液を収容する主容器1と、第二液を収容する補助容器2とからなる二液混合容器であって、上記主容器1は、第一口頸部4を起立する第一容器体3と、該第一容器体の第一口頸部に周壁8を嵌合させかつ頂壁7上面に上方および前方開口の凹陥部10を設け、該凹陥部の底面11に第一口頸部内に連通する透孔12を穿設したキャップ体6と、上記凹陥部10両側壁に起伏自在に枢着することで起立状態にあっては上記透孔12と連通し、かつ倒伏時には外側面で透孔12を閉塞するノズル体13とで、また上記補助容器は、第二口頸部15を起立した第二容器体14と、該第二容器体第二口頸部外面に外部周壁19を嵌合すると共に、外部周壁上端から内向きフランジ20を介して上記第二口頸部内面に沿って、内部周壁21を垂下した筒状体17とでそれぞれ形成され、該筒状体の内部周壁には起立状態で上記ノズル体13を押し込むことで開口される閉塞手段22を設けた。

「作用」

二液混合容器不使用流通時は、第1図(A)、(B)に示すごとく主容器1および補助容器2は独立容器としてそれぞれ第一液および第二液を収容する。

二液混合時には第3図に示すごとく、主容器1のノズル体13を起立させ、透孔12と連通状態とし、そして補助容器2を倒立状態としてその内部周壁21に上記ノズル体13を押し込むことで閉塞手段22を開口し、補助容器内の第一液を主容器1内へ注入すると共に、連結状態での主容器および補助容器を上下に振ることで二液混合を行なう。注入が終われば補助容器をはずし、ノズル体13を起立させることで主容器1からの液体の注出ならびに透孔12の閉塞を行なうことができる。

「実施例」

本考案二液混合容器は、第1図(A)、(B)に示す第1実施例のごとく、第一液を収容する主容器1と、第二液を収容する補助容器2とからなる。

上記主容器1は、第一容器体3から第一口頸部4を起立させており、この第一口頸部外面には第一螺条5を周設している。

6はキャップ体であり、このキャップ体は頂壁7から周壁8を垂下しており、この内面には第一螺溝9を周設している。この周壁は上記第一口頸部外面に螺合されてお

り、頂壁7には上方および前方開口の凹陥部10を設け、この凹陥部の底面11には、第一口頸部内に連通する透孔12を穿設している。

13はノズル体であり、このノズル体は上記したキャップ体の凹陥部10の両側壁に起伏自在に枢着されている。そして、このノズル体が起立状態にあっては上記透孔12と連通し、かつこのノズル体が倒伏状態にあってはこのノズル体の外側面で透孔12を閉塞している。

次に、上記した補助容器2において、14は第二容器体であり第二口頸部15を起立しており、この第二口頸部外面には第二螺条16を周設している。

17は筒状体であり、この筒状体は第二口頸部15外面に第二螺溝18を内面に周設した外部周壁19を螺合させており、その上端からは内向きフランジ20を介して上記第二口頸部内面に沿って内部周壁21を垂下している。この内部周壁には、上記したノズル体13がこの内部周壁内に押し込まれた際に開口する閉塞手段22を設けるが、本第1実施例では第1図Bに示すごとく栓体23を内部周壁下端部に嵌合させている。また、閉塞手段22として第4図に示す第2実施例のごとく、アルミ箔等のシール24を内部周壁下端面に接着してもよい。なお、補助容器2の内部周壁21内にノズル体13が押し込まれても閉塞手段22が開口しないように、また未使用状態であることを一目でわかるようにするために、外部周壁19上端から破断線25を介して破断筒25を起立させてもよい。

上記キャップ体6、筒状体17およびノズル体13は、ノズル体を起立させ筒状体の内部周壁21にノズル体を押し込んだときに、キャップ体頂壁7と筒状体内向きフランジ20とは互いに密接状態にあり、しかもノズル体13は閉塞手段22を開口状態とするように製作される。

「考案の効果」

本考案は以上の構成であり、主容器1のノズル体13を倒立状態の補助容器2の内部周壁21内に押し込めば、簡単に補助容器2内の第一液を主容器内へ注入でき、上記連結状態の主容器1および補助容器2を上下に振れば、第一液注入状態で簡単に二液混合ができ、また二液混合の後には、ノズル体13を起伏させるだけで液体の注出および透孔12の閉塞ができる、従来になく使用便利な二液混合容器を提供することができる。

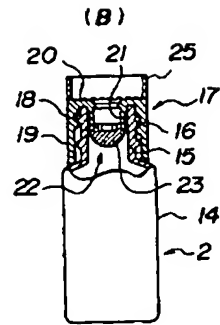
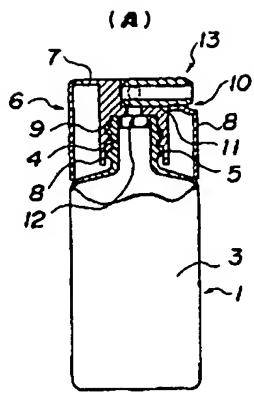
「図面の簡単な説明」

第1図(A)、(B)は本考案二液混合容器の第1実施例の主容器および補助容器それぞれの側断面図、第2図(A)、(B)はそれらの平面図、第3図はそれらの二液混合時の側断面図、第4図は第2実施例補助容器の側断面図である。

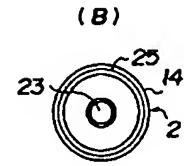
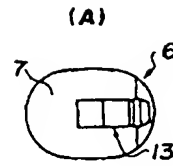
1…主容器、2…補助容器

13…ノズル体、22…閉塞手段

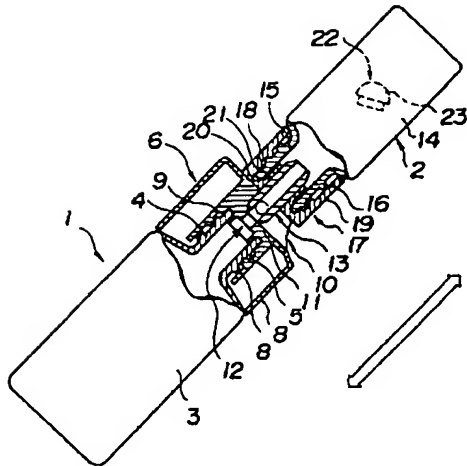
【第1図】



【第2図】



【第3図】



【第4図】

